

中国の寺と人々の生活

——天童寺友好訪中団に参加して——

石黒 鈺 二

一、はじめに

一九八一年七月、中国の太白山天童寺を拝登し、仏教を通じて日中両国の相互理解を深め、あわせて江南の景勝地杭州・蘇州などをたずねるといふ趣旨のもとに訪中団が結成されるということ、私は進んでこれに参加することにした。

今から七十五年も前に、二十四歳の青年僧道元が仏教の本義をきわめたいという願いをもって中国に渡り、約五年間諸山の名僧を訪ね、終に天童寺の住持如浄によってそれを会得したといつてんまつは周知のことである。私は曹洞宗の教義についてとくに研究したわけではないが、青年僧道元の仏教遍歴と悟得をとりまく時代と環境に興味をもち、時代は隔たり、社会状況は変わっているが、一度その地をじかに観察したいと思った。

いまひとつの興味は、社会主義体制下にある中国で、宗教とくに仏教が民衆の生活にどのようなにかかわっているかをこの眼で

中国の寺と人々の生活（石黒）

確かめることである。共産主義と宗教との関係についてはすでに多く論じられているが、私の興味は共産主義の理論と仏教の教義との関係にあるのではなく、現代中国の民衆の生活の中で、日本にみられるような宗教意識に根ざす行動——僧侶の宗教的実践をも含めて——がどのような姿で存在するかを知ることにある。

杭州や蘇州の観光も私にとって大きな魅力ではあったが、上述の二つの興味が私の訪中団参加を促進したより大きな原動力であったことは確かである。

二、訪中旅行の経過

七月二十五日結団式。七月二十六日大阪空港発日航機で上海に飛び、上海から汽車で杭州に行き、西冷賓館に宿泊した。翌二十七日朝バスで天台山に向かう。途中曠県の竹細工製作所で休憩し、午後二時天台山国清寺に着く。僧侶の出迎えを受け、そこで般若心経を讀経して回向、続いて寺内を参観し、同夜は国清寺の宿

中国の寺と人々の生活（石黒）

舎で宿泊する。翌二十八日朝同寺発、寧波の仏教協会（七塔寺）、阿育王寺を歴訪し、五仏塔を経て天童寺に至る。同夜はその宿舎で宿泊した。翌二十九日には早朝三時十五分より天童寺の勤行に参加し、引き続き訪中団も団長竹田鉄仙学長の主宰で般若心経による読経と回向を行なった。

朝食後、同寺発寧波・紹興を経て杭州に至り、西湖畔の杭州飯店に泊る。翌七月三十日は靈隱寺に参詣後、市内の物産展示館や柳浪聞鶯公園などを見物した。西湖周辺の風景は評判通りすばらしいものだった。翌七月三十一日杭州発、上海を経て蘇州に至る。

蘇州ではまず獅子林をみて蘇州飯店に宿泊した。洋風の立派なホテルである。翌八月一日は留園・虎丘雲巖寺・寒山寺・拙政園を歴訪した。留園と拙政園は岩石や池亭を巧みに配置した規模の大きな中国風の庭園である。午後蘇州発、汽車で上海に向かう。上海では市内見物の後衡山賓館に泊る。翌八月二日は午前中市内見物、午後上海（虹橋）空港から日航機で大阪空港に帰着、解散した。

三、寺と僧侶

現代の中国で仏教の寺院がどのような状況にあるかについては本紀要第十号（一九八一年）の竹田鉄仙・鈴木哲雄両氏の「訪中日誌」にも紹介されているが、こんど訪れたのは江南の地域であ

り、寺の数も多いのでその概要を記しておく。

はじめにたずねた国清寺では黒色および灰青色の僧衣をまとった僧侶が三名出迎えにでてくれた。監院は可明師といい、五十三歳の小柄で丸顔の若々しく見える人で、おだやかな笑顔をもって歓迎の挨拶を述べられた。ここには僧侶が六十名いて修行しているが、日常は農耕に従事しているということ、寺内に僧衣の人をあまり見かけないことも納得できた。早朝に勤行があると聞いたが、私どもは参加しなかった。

この寺の仏像は四人組による文化大革命の時ごとく破壊されたが、最近修復したとかで、仏像が皆ま新しいこと以外には、ほとんど破壊のきずあとを残していなかった。

天台山は奥深い山の中で、九十九折の長い峠道を越えて行かなければならないので、バスのない昔最澄や栄西がここを訪れるのはずい分苦しい行程ではなかったかと思う。このようなところだから、天台山はもと仙郷として道家の信仰の地となっていたが、陳の時代にここで智顛が仏教の修行をしてから、仏教徒の集まる場所となったと伝えられる。中国の仏教が固有の信仰である道教と結びつき、それと妥協して発展したといわれるのも、このような経緯と関係があるのかもしれない。

いずれにしても現在国清寺の堂塔伽藍はよく整備されているが、仏教修行の場としては十分その機能をはたしているかどうか疑わしい。

天童寺は立派な堂塔伽藍を擁して、国清寺以上によく整備されている。僧侶の数は五十名くらいで、日常作業もするが、仏教の修行により多くの時間をあてているようであった。住持は広修法師で百六十七世という。法燈を継いで千余年、歴史の重みをいたく感じさせられた。ここでは早朝の勤行に参加したので、衆僧の読経と回向の姿を直接見る事ができた。

阿育王寺は古い歴史をもち、壮大華麗な堂宇を擁しているが、破壊された仏像の修復はなお途上であり、金色に塗られる前の木地のままの仏像が何体も見られた。舍利殿の脇に線香をたて、読経をカセットテープで流していたひとりの青年僧がいた他には、僧衣をまとった人を見かけなかった。いかにも形式的な感じで、この寺が現在は観光の場であるが、仏教修行の場ではないことを象徴しているように見えた。

寧波仏教協会のある七塔寺では一隅で仏像の台座らしいものの木彫をしていた。ここは街中の寺で堂宇も小さくてみすぼらしいが、ほとんどの仏像がまだ木地のままで、破壊のあとが一層なまなましく感じられた。蘇州の寒山寺でもそうであったが、出てきた僧侶は一人だけである。

わが国でも明治初年に、とくに薩摩で廃仏棄釈がはげしく行なわれたが、中国の文化大革命における仏像破壊は、それをはるかに越える大企模かつ徹底したものであったことがよくわかる。しかしここ二、三年の間に修復された仏像もまたおびただしい数に

中国の寺と人々の生活（石黒）

のぼる。その破壊と建設の速さとスケールの大きさ、およびそれを遂行するエネルギーの大きさに驚かされる。

しかし寺や仏像は修復されたものの、僧侶は国家から寺の保守管理を命ぜられた服務員にすぎないということから考えると、なお修復されたのは仏殿や仏像だけではないのかという気がしないでもない。天童寺には永平寺曹洞宗管長の手によって、一九八〇年に「日本道元禅師得法靈蹟碑」が建てられていたが、青年僧道元をして悟得に導いたこの地の仏教の真髄ともいべきものが、はたして今もなおどこかにひそんでいるのであろうか。

四、寺と民衆の生活

寺と民衆の生活との結びつきには次のようなタイプがある。

(一) 寺が信仰の拠りどころとなり、宗教的実践の場となる。日本では講とか法会がそれにあたる。またこれの現代化されたものとみることができ、永平寺のように個人または団体の修養道場とされる場合もある。

(二) 寺が祖先崇拜と結びつき、先祖供養の場を提供する。日本における親族の弔い、法要、あるいは彼岸や盂蘭盆会の行事などはその例である。これを政治的に逆に利用したのが江戸時代の宗門人別改めである。

(三) 寺が民衆の現世利益の要求と結びつき、その生活の中に浸透する。家内安全、安産、受験合格などの祈願がなされ、あるいは

中国の寺と人々の生活（石黒）

仏前結婚などの式場とされるのがそれである。

四寺が民衆のレジャーを楽しむ場、観光の場とされる。東京の浅草観音や名古屋覚王山の日泰寺などのように宗教意識と結びついたものもあるが、ほとんどそれを含まないで、京都の銀閣寺とか苔寺とかのように観光あるいは美的鑑賞の対象ではないものもある。

さて中国では、この旅行で見た限り、寺が民衆の仏教信仰の拠点となり、明らかに宗教的実践の場となつているとみられたのは、寧波市仏教協会のある七塔寺だけであつた。協会の看板がかつた入口の建物では仏像の台座か何かの木彫の作業場の観を呈していたが、その脇を通り抜けた裏側の薄暗い建物には仏像の前でローソクの光の中に十数名の人々が跪坐して声高らかに称名念仏をしていた。後姿だけで定かにはわからないが、女性が多く、しかも老人が大部分のように見受けられた。そこには在家の信徒によつてももし出される一種の親しみやすい宗教的雰囲気かただよつていた。

案内者の陣杏奎さんや奚鳳仙さんに聞くと、このような宗教的行為は一般にはあまり見られないということであつた。社会主義体制となる前の中国における仏教寺院と民衆との結びつきがどのようなであつたかはよくわからないが、その当時の若者の中にあつた仏教信仰が老人になつてもなおほそほそと生き続けてきたのか、あるいは職業生活から引退して死と向かいあうようになつて

おこる不安からの解放を求めてなのか、そのいずれかであろう。中国にも、この世の幸せに望みを絶ち、来世の極楽浄土に往生をしたいと願う「来世往生」の信仰があることは、「浄土論」や「瑞応伝」によつて知られるが、近代以降の中国では民衆の現実主義的傾向が、この世の幸福を求める「現世利益」の信仰と結びつくことの方が多かつたのではなからうか。

こんど訪れた多くの寺で、最前部にある仏殿―たとえば天童寺では天王殿―の入口正面に弥勒菩薩の化身とされる布袋の像が安置されている。布袋さまは大きな腹をかかえておだやかな笑顔で民衆に近づく、いかにも幸福をもたらす仏さまという感じがする。霊隠寺の場合は、その両側に次の句が大書されてあつた。

説法現身容大度（右側）

救人出世尽歡顔（左側）

「出世」はもちろん現代語の意味とは異なり、「仏が衆生を救うためにこの世に出現すること」であるが、この仏像から受ける全体の印象としては、衆生を救うということはまさに現世に幸福をもたらすことであると民衆に呼びかけるものをもっている。このことから中国の寺は「現世利益」を強調して積極的に民衆の生活にとけこもうとしてきたことがうかがい知られる。

五、生活の中の仏教

中国の仏教は民衆の生活の中にとけ込むために、中国固有の習

俗、すなわち一族結合とその核心となる祖先崇拜、あるいは親子の儒教的倫理などを教義の中に包摂するようになったともいわれている。しかし案内者の奚鳳仙さんの話によると、現在の中国では、死者の弔いにも仏教的儀礼は用いないし、孟蘭盆会の行事も行なわれていない。

死者の弔いについては、親族（通常いとこまで）と職場の上司・同僚などが集まり追悼会を開く。一年たつと命日のころに、こゝろは親族だけが集まり、死者を偲ぶ会を開く。もちろん仏教の儀礼とは無関係である。

孟蘭盆会はもと中国で翻訳された「孟蘭盆経」に、目蓮の母の苦しみを救うため夏安居の最終日七月十五日に、衆僧を供養し、先祖に供物をすることを説いていることに基づいていると考えられる。それを受け入れた日本では民衆の生活の中に長く定着しているのに、中国ではすでに消滅しているということはおもしろい。

彼岸の先祖祭りはもともと鎌倉時代以後民間に普及した日本的な仏教行事と聞いていたが、念のため奚さんにただしてみると、やはり全く知られていないようである。

結婚式に神道や仏教の儀礼を用いることは、日本では広く行なわれている。そしてどの儀礼によるかはかなり便宜的で、当事者の宗教的信仰にあまり関係がない。日本では神道と仏教を知識の上で明確に区別する人でも、日常の生活感覚や態度の上では峻別

中国の寺と人々の生活（石黒）

しないことが多い。たとえば結婚式は神前で、葬式はお寺でというふうであっても誰もあやしまない。中国の結婚式には死者の弔いの場合と同様、親族や職場の上司・同僚などが参列するが、宗教的儀礼は用いないということである。

ちなみに、現在の中国では結婚は一般に自由結婚であるが、その年齢は二十五歳以後とするようにすすめられている。しかしその制約はそれほど強いものでなく、十八・九歳で結婚する場合もあるという。夫婦は別姓を称し、子どもは一人だけと国で決められている。結婚しても夫婦が近いところに職場が変わることはできない。都市では通常夫婦と親は分離して生活するが、老いた親が動けなくなると同居する。

上海などの大都市では核家族化が進んでいるようであるが、そのような生活上の変化が、制度上の拘束と相伴なって、祖先崇拜・親子の倫理を基盤とする道徳意識や宗教意識の変容を促進することになるのではなからうか。

日曜日でも縁日でもないのに、寺に多数の人々が集まってにぎやかであったのは、杭州の靈隱寺であった。そこでは仏像の前で合掌して拝む若い人を二、三見かけたが、線香や賽銭をあげている風はなかった。その多くは、岩壁に刻まれた布袋の石仏の前や仏殿の前で記念写真をとる若い男女、案内者から寺の説明を聞いている華僑らしい団体などで、いかにもレジャーを楽しむという様子である。老人がほとんどいないことがちょっと気になる。こ

中国の寺と人々の生活（石黒）

これらの人々の多くは上海から来ているということであるが、老人はひまはあっても旅費がかかるのでなかなか出歩けないのではなからうか。

いま中国では時差通勤ならぬ日差休業（？）が実施されており、各職場で計画的に週日を分けて休日とする。たとえばB工場は火曜休日、A工場は木曜休日というふうである。そのために人々が日曜日に一度に公園やその他の娯楽施設に殺到することが避けられ、いつも多くの人々が適当にそれらの施設を利用することができることになる。

靈隠寺のほか、蘇州の虎丘雲巖寺もそのような人々にぎわっていたが、獅子林・留園・拙政園なども同様であった。いまの中国では、寺は信仰の場というよりむしろ民衆が古い文化遺産にふれ、レジャーを楽しむ観光地としての役割を果たしているように思われる。

寺についていまひとつ気づいたことは、仏殿や仏像がきれいに保管されていることである。それはそれでよいのであるが、日本では祈願のためお礼をはったり、紙を結びついたりする、あの民衆との緊密なあたたかい結びつきがみられないのである。

現在の中国では、かつて存在したはげしい貧富の差の解消、貧困からの解放は達成されたかもしれない。そしてそれはたしかに民衆の生活にとって非常に重要なことである。しかしまだ社会生活に伴なう不安―交通事故や病氣、仕事や受験の失敗など―に関

する不安や悩みはなくなつてはいないであろう。現在の民衆はその不安からの脱出を仏教（寺）によって求めようとはしていないように見える。が、将来はどうであろうか。四つの近代化（農・工・国防・科学技術）の政策が進められるに従つて、受験競争、能力差に基づく生活条件の個人差の増大、交通事故やその他の災害などにかかわる不安や悩みの要因は増加するであろう。その時仏教は民衆の生活に再び結びつくモメントを内蔵しているだろうか。このことが中国の仏教の将来を占う鍵であるような気がする。

六、おわりに

天童寺友好訪中団に参加して、とくに寺と民衆の生活との関係について見聞したところをまとめてみた。わずか八日間の、それも限られた江南地区についての経験から、かんたんに「中国では」などと一般化していることは危険である。しかし社会主義体制下の中国では、民衆の生活が国家の方針によってかなり強く画一化されているので、その一断面から全体を推測することが必ずしも是はずれの謬見となるとばかりは言えないと思う。私はここで得られた少しばかりの情報によってまとめられた知見を、今後機会あるごとに補充し訂正して、中国の寺と民衆の生活についての理解をより正しく深いものにしていきたいと思っている。

旅行中に、中国の青年―大学や外国語学院の日本語学科の学生たち―がしばしば日本語で話しかけてきた。日本のことを直接日

本人から聞いて確かめたいという彼らの気持がよく読みとれた。中国の青年に日本を美化もせず、露悪的にもならず、正しく伝えて、日本に対する理解を深めてもらうように努めることも、日中相互理解の促進のために大切ではないかと思う。

中国の寺と人々の生活（石黒）



天童寺仏殿前にて（朝課終了後）